九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

方言と差別語 : Huckleberry Finnにおける言葉の二面性

藤崎, 睦男
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/5340

出版情報：言語文化論究. 13, pp.15-24, 2001-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

方言と差別語 — *Huckleberry Finn* における言葉の二面性

藤崎睦男

I

文学作品は永遠のテーマを複雑な形式の中に具体化したものではなく，その作品が生まれた時代を映し出し，同時代の社会秩序を再定義するものだと言われることがある。しかし「芸術家の反時代的精神」とか「時代を先取りする作品」といった言葉も依然として有効なはずであり，でなければ変革も革命も起こり得なかっただろう。些か大袈裟な書き出しであるが，ここでは文学論や文明論を行うつもりはない。ただ一方でアメリカ文明に新たな表現形式を生み出した「古典」とまでいわれる作品が，他方では時代の変化につれてさまざまな理由から非難の対象となって来た事実をみるとき，その原因の一端を探ってみようとする気になるものである。その作品とは *Adventures of Huckleberry Finn*（以下 *Huck*）である。本論は1885年２月前後の *Huck* 出版にまつわる事情及び同時代の反応を調べ，同時に今日同作品にしばしば浴びせられる‘racism’の批判への流れを探って行こうとするものである。 カリフォルニア大学の Mark Twain Project が1988年に決定版として *Huck* を出版したが，その序文において作品制作過程が詳しく述べられている。それによると，第一草稿ができあがったのは1883年８月末であったが，その後 Twain は修正に修正を重ねた。そして完成した作品を共同出資して設立した出版社 Charles L. Webster and Company のパートナーである Webster に送ったのは翌1884年４月であった。出版にはそれから1885年２月18日までさらに10カ月を要することになる（英国とカナダでの出版は1884年12月10日）。出版社に作品を送ってから出版までこのような異常ともいえる長い時間を要した理由は，Twain の販売促進のための入念な宣伝活動にあった。Walter Blair は Twain の当時の意気込みを次のように述べている。

> By that time, he claimed, he had repeated thirty times to his manager a rule for publishing *Huck*: "The book is to be issued when a big edition has been sold--and not before. . . . There is *no date* for the book. It can be issued the 1st of December if 40,000 copies have been sold. It must wait until they *are* sold, if it is seven years." (363)

Twain は自作の販売を‘subscription’という予約購読の方法で行っていた。‘agent’と呼ばれる外交員が各家庭を戸別訪問し見本やパンフレットを見せ，購入の予約を取って回るのである。そのためには出版前に作品の知名度を高め，予約数を確実に増やしておく必要がある。したがって予約拡大が最優先されそのために費やす時間はあまり問題ではなかっ

たようだ。宣伝効果の多くはむしろ彼が予期した以外の方向から現れたが，結果的には作品の販売は成功した。カリフォルニア大学版序によると，Webster は５月６日には米国内で51,000部売れたと述べているが，この数は大体1980年に置き換えると210,000部に相当するということからも，当初から多くの人々に読まれたと思われる(xlix)。

Twain が本の知名度を上げるために取った手段の一つは出版直前に行った George Washington Cable との講演旅行である。彼は1884年11月から翌年２月初旬まで，主に東部や中西部の60以上の都市で作品の一部を聴衆の前で読んで回っている。百回以上の講演の中で扱われた演題は30以上あり，その中の三分の一が *Huck* からのエピソードであった(Appendix to *Huck* 765)。さらに講演で読まれた部分が各地の新聞によって論評され引用されることで，ますます宣伝効果は高まって行った(Vogelback 261)。　二つ目の手段は新聞や雑誌に作品の一部を直接送り掲載させることであった。Twain は *Century* に12月，１月，２月，の３回にわたって作品の一部を掲載したばかりか，数社の新聞社にも見本や抜粋を送り掲載している(Vogelback 261)。これによって *Huck* に関する記事が各地の新聞等で大いに取り上げられ出版前から話題作りに成功したのである。

出版前の書評は概して好意的であったが，中には後になって再三非難される論調が既に見受けられる。例えば，２月１日の *Herald* は既に *Century* に掲載された作品の一部について，

> Mark Twain's "Royalty on the Mississippi" has a trifle of "too muchness of that sort of thing," which is the prevailing characteristic of this kind of writing. It is pitched in one key, and that is the key of a vulgar and abhorrent life.(Fischer 128)

と述べ，以後 *Huck* を批判するときの常套語句の一つとなる "vulgar" という言葉を使用している。既に西部の粗野なユーモア作家と評価されていた Twain の新作が，断片的に部分を公表されることによって得るものは，それ以上の評価ではなかった。否むしろ，時としてそれ以下の判断を下されたのである。というのは，作品の全体像を得る前に，*Century* 等に掲載されたような部分的エピソードを読み，さらにそれについての批判的書評を見れば，読者が先入観を持たされる可能性は大いにありうからである。ステレオタイプに描かれた Jim の愚かさ，怨念による血で血を洗う凄惨な抗争，その他川筋で出会う詐欺師や殺人などと共に語り手 Huck の粗野な方言等によって断片的に与えられるものは，"a vulgar and abhorrent life" のイメージであり，例えば，Huck と Jim の自由への逃避行というような大きなテーマは見えて来ない。

Victor Fischer は，1885年から97年にかけて *Huck* に関して書かれたもののうち，現在20以上の書評と100以上の短評が発見されているが，実際にはそれ以上のものが当時は出版されたはずだと述べ，それらをを引用しつつ，初期の批評動向を詳細に論じている。彼はその中で，Twain の意図した以外で偶然に作品の宣伝効果を生んだ事件として，「猥褻挿絵事件」，「Estes & Lauriat 訴訟事件」，「Concord 公立図書館禁書事件」の３件をあげている(127-28)。作者の予約注文を促進するための宣伝活動に加え，図らずも起こってしまった3件の事件はさらに大きな宣伝効果を上げ，*Huck* の販売部数は約１カ月足らずで上記のような数字までに達したのであるが，これらの事件は，作品の将来を予言するような事件

でもあった。

戸別訪問によって本の契約を取って回る‘subscription’という販売方法では，見本の挿絵は読者の購買意欲を高めるのに大いに役に立つ。Twain は当時 *Life* や *Daily Graphic* 等に定期的に寄稿していた23歳の画家 Edward Windsor Kemble に依頼して，*Century* に一部掲載分の *Huck* の挿絵に続いて初版本の挿絵を描かせていた(Briden 384)。この作業も順調に進行していると思われていた時，思わぬ事件が発生した。戸別訪問用の見本の一カ所に猥褻な挿絵が同じく卑猥な含みのあるキャプションと共に発見され，これに多数の新聞がとびついたのである。1884年11月27日の *New York World* は“Mark Twain in a Dilema [sic]--A Victim of a Joke He thinks The Most Unkindest Cut of All”と題して事の経緯を報告している。それによると，印刷直前に一人の製版工が“a wicked spirit”に取りつかれ細工を施したもので，

> A mere stroke of the awl would suffice to give the cut an indecent character never intended by the author or engraver. It would make no difference in the surface of the plate that would be visible to the naked eye, but when printed would add to the engraving a characteristic which would be repudiated not only by the author, but by all the respectable people of the country into whose hands the volume should fall. (Vogelback 262)

途中の検査を擦り抜けた約三百冊の見本は，猥褻な挿絵を載せたまま訪問販売員の手から多数の読者の目ににさらされた後，ようやくある販売員からの手紙で出版社の知るところとなった。Twain は速やかに回収し，本来の挿絵と差し替えたが時既に遅く，新聞の格好の材料となってしまったのである。競争相手の出版社が社内に飾ったというその挿絵は今日でも，例えば，カリフォルニア大学版（Textual Introduction 483）等で見ることができるが，確かに少年向けの本の挿絵としては今日でも物議をかもすに違いないような物が描かれている。ましてや当時のヴィクトリアニズム的きまじめさと礼節を重んじる風潮の中では，作品自体に相当‘vulgar’なイメージを植え付けたであろうことは想像に難くない。挿絵事件の処置が終わって間もなく，今度は翌月にボストンの出版社兼本屋 Estes & Lauriat が自社のカタログに無断で *Huck* の広告を出すという新たな問題が持ち上がった。Twain はこの時期既に国中の訪問販売代理人の元に本を送り，予約購読者に２ドル75セントで売るべく契約を結んでいたが，Estes & Lauriat 社の発表した価格は Twain が設定したものより50セント安い２ドル25セントであった。実は二人の代理人があらかじめ Estes & Lauriat 社との間で百冊以上の *Huck* を渡す契約を結んでいたのである。訴訟が始まるとすぐにカタログから問題の広告は外された(Vogelback 263-4)。代理人はいわば横流しを目論んでいた訳であるが，この事件においてもむしろ Twain に対し手厳しい反応があった。数か月後の３月５日，*Evening Traveller* は次のような記事を掲載している。

> It is little wonder that Mr Samuel Clemens, otherwise Mark Twain, resorted to real or mock lawsuits . . . as a means of advertising that extraordinary senseless publication. Before the work is disposed of, Mr Mark Twain will probably have to resort to law

> to compel some to sell it by any sort of bribery or corruption. It is doubtful if the edition could be disposed of to people of average intellect at anything short of the point of the bayonet.(Fischer 135)

訴訟は売らんがための宣伝が目的のまがい物で，販売拡大のためには作者は賄賂でも腕ずくでも手段を選ばないという批判は，作品のみかTwainの人格まで標的にしている。

そしてなによりも*Huck*の負のイメージを決定的にしたのは，若者に悪影響を与える不道徳な“the veriest trash”(Champion 13)としてコンコード公立図書館から排除された事件であろう。このコンコード図書委員会の決定に関する報道は，初日の3月17日だけでも6件に上り，7月までの関連記事の合計は少なくとも57件にも上った(Fischer 169-70)。いくつかの新聞は委員会のメンバーの意見を客観的に述べたものであったが，中にはTwainの過去の事件までも引き合いに出しながら，作者と作品の両方を痛烈に批判したものもあった。3月17日の*Springfield Daily Republican*を例にとって見ると，

> The Concord public library committee deserve well of the public by their action in banishing Mark Twain's new book, *Huckleberry Finn*, on the ground that it is trashy and vicious. It is time that this influential pseudonym should cease to carry into homes and libraries unworthy productions. . . . The trouble with Mr. Clemens is that he has no reliable sense of propriety. His notorious speech at an *Atlantic* dinner, marshaling Longfellow and Emerson and Whittier in vulgar parodies in a western miner's cabin, illustrated this; . . . The advertising samples of this book, which is disfigured the *Century* magazine, are enough to tell any reader how offensive the whole thing must be. They are no better in tone than the dime novels which flood the blood-and-thunder reading population; Mr. Clemens has made them smarter, for he has an inexhaustible fund of “quips and cranks and wanton wiles,” and his literary skill is of course superior, but their moral level is low, and their perusal cannot be anything less than harmful.(Champion 14)

*Huck*を追放したコンコード図書委員会の正当性を主張するために，この作品の有害性を強調するばかりか，作家自身の品性の欠如までも指摘している。その根拠として引き合いに出されるのが，1877年12月17日，Bostonでの Whittierの70歳記念晩餐会でTwainが行った“Whittier's Birthday Dinner Speech”である。会場には，Emerson, Longfellow, Holmes等文学界の長老を含む，ニュー・イングランドの‘Brahmin’達が勢揃いしていた。彼はスピーチの中で，上記の三人を戯画的に描き，シェラネヴァダ山中の小屋で酒を飲み，いかさま賭博をし，悪態をつく流れ者として登場させるが(Budd 695-99)，このジョークのユーモアは出席者のほとんどに理解されず，むしろ人々を唖然とさせ顰蹙を買う結果となった。ニュー・イングランドの新聞を初めとして世論の多くがTwainの無作法を憤った。Twainの真の意図が奈辺にあったにしろ，このスピーチは当時支配的な文化，すなわち‘genteel tradition’に対抗する新しい‘popular culture’の反抗という図式に当てはめられるようになったが，少なくとも当時の人々の多くにとって，Twainのスピーチは礼節を重んじる伝統に対する，粗野で不道徳な行為として我慢ならなかったのである。このよ

うな背景を念頭に置けば，Fischerの次の主張は納得出来る。

> For them [Critics schooled in the 'genteel tradition'], the mockery of Miss Watson's Providence, the depiction of Pap's delirium tremens [sic], Huck's facility as a liar, not to mention the violence and corruption of the society along the river, inevitably seemed 'coarse,' 'grotesque,' in 'bad taste,' and not very funny. The most extreme of these welcomed the Concord Library committeeman's characterization of the book as 'trash of the veriest sort.' On the other side were the critics who prized the 'Western' side of Mark Twain, who saw truthfulness in his characterizations and his picture of vanished life along the river, praised his use of the vernacular, and recognized the book as a 'tour de force,' 'a work of literary art' far superior to anything he had yet written. Many of the reviewers fell somewhere between these two extremes, evidently torn between their expectations about ideal literature (especially for children) and their recognition of the book's extraordinary qualities.(Fischer 157)

Fischer が述べるように，コンコード図書館禁書事件は賛否両論様々な段階の報道や批評の対象となったが，大別すると Boston などニュー・イングランド地方のジャーナリズムは批判的で New York や西部のそれは好意的であったと言えよう。この一連の論争は次第に，*Huck* を文学作品としてまともに分析しようとする方向へと向かっては行ったが，当面は社会的に耳目を集める事件として，一種のスキャンダルとして扱われる傾向にあったようだ。このことは，はからずも *Huck* の知名度を上げ，発行部数をのばす結果となった。発売に際して綿密な販売計画を推し進めていた Twain にとっては好都合であったし，注目を集め活発な批評が行われたことは，結果的には作品にとっても良しとしなければなるまい。しかし，特に 'genteel tradition' の側から浴びせられた痛烈な非難と "trash" というレッテルは，一種のトラウマのごとく *Huck* という作品評価の中に潜伏し，現在の批判に通底するものを生み出したのではないかと思われるのである。

II

出版当時の数々のスキャンダルにも関わらず，時代の経過とともに *Huck* に対する評価は次第に確立して行った。1900年から20年代にかけては，H. L. Mencken や Bernard DeVoto 等からは Twain 最高の作であり，アメリカ文学の傑作であると評され，次の30年から50年代には，アメリカ文学のみか世界の文学の古典にまで祭り上げられてしまう。Lionel Trilling はこの作品を "one of the world's great books and one of the central documents of American culture" (271) と絶賛し，かって "vulger" であると非難された方言についても，今やアメリカ独自の散文を作り出し，作品に活気，明晰さ，優雅さ等を与えるために必要不可欠な部分であると，評価を与えている。

> Although today the carefully spelled-out dialects of nineteenth-century American humor are likely to seem dull enough, the subtle variations of speech of *Huckleberry Finn*,

of which Mark Twain was justly proud, are still part of the liveliness and flavor of the book.

Out of his knowledge of the actual speech of America Mark Twain forged a classic prose. The adjective may seem a strange one, yet it is apt. Forget the misspellings and the faults of grammar, and the prose will be seen to move with the greatest simplicity, directness, lucidity, and grace. (279)

さらに T. S. Eliot は，Twain が“a new way of writing”を発見した作家と認め，その手段となった方言の使用については，“one of those rare writers who have brought their language up to date, and in so doing, 'purified the dialect of the tribe.'”(375)と，称賛を惜しまない。

このように出版時のスキャンダルが単なる遠い過去のエピソードとなったかに思えたころ，1957年 *New York Times* によって New York 市の教育委員会が *Huck* を有害図書として小中学校の認可図書リストから除外したことが報じられた。これは同じ年に NAACP が，Twain の多くの作品の中にある“racial slurs”や“belittling racial designations”を非難したこと(Henry 26)と連動するもので，同様の処置が他州にも波及して行った。この時期，公民権運動の高まりの中で黒人の人権意識の高まりと教育への参加が，*Huck* を全く新しい視点の中に置いて読まざるを得なくしたのである。その後もこの作品に対する‘racism’の非難は収まらず，1982年にはヴァージニア州 Fairfax 郡の小学校で，1984年にはイリノイ州 Waukegan で排斥され(Kaplan 356)，今日に至るまで同様の傾向は続いている。

ここでは *Huck* が人種差別的作品か否かについて論じるのは目的ではないので，現状を述べるに止める。問題にしたいのは，先にも示唆したように，出版当時に *Huck* に向けられた非難や排斥運動と現在進行しているそれとの関連である。確かに両者には現象面は同じ排斥ではあっても内容的には大きく異なっている。しかしここでは，あえて現象面に，すなわち両者とも非難の直接のターゲットが作品の中で使用されている言葉である点に注目したい。1957年に New York 市が *Huck* を有害図書としたことに関して，9月12日の *New York Times* がその具体的理由を，“The general belief was that the action was taken because Huck, using the language of the 1830's and 1840's in Missouri, used the word 'nigger.'”(Blair 390) と述べている。この発言が興味深いのは，特定の時代及び地域の方言と“nigger”という差別語の両者が，全く異なる範疇にありながら，同時に槍玉に上がっていることである。ちょうど公民権運動の高まりの中で，非難の対象が，単なる“vulgar”な方言から差別語に移って行く過渡期を示している発言と見れば非常に興味深いものである。しかし，むしろ両者が異なった範疇にありながら，境界が曖昧になっているという点の方が問題なのではないか。即ち，かって“vulgar”であると非難された方言と現在批判されている差別語は同じ言葉の表と裏であるということである。したがって，このような言葉について述べるとき作者は意識的に自分の都合のよい範疇で語ろうとする。この点については，John H. Wallace が，Twain に限らず，他の特定の白人作家にも当てはまる彼らの誤謬を指摘することで明らかにしている。

According to *Webster's Dictionary*, the word “nigger” means a Negro or a member of any

> dark-skinned race of people and is *offensive*. Black people have never accepted "nigger" as a proper term--not in George Washington's time, Mark Twain's time, or William Faulkner's time. A few white authors, thriving on making blacks objects of ridicule and scorn by having blacks use this word as they, the white authors, were writing and speaking for blacks in a dialect they perceived to be peculiar to black people, may have given the impression that blacks accepted the term. Nothing could be further from the truth.(Wallace 17)

つまり，"nigger" という差別語を "dialect" という範疇に取り込むことによって，差別語であるという意識を希薄にしてしまうのである。このような傾向は現在の批評家にも多々見られることである。例えばJustin Kaplanが*Huck*の中で登場人物たちが使用する人種差別的な言葉について，以下のように弁護する中にも現れている。

> It seems unlikely that anyone, of any color, who had actually read *Huckleberry Finn*, instead of merely reading or hearing about it, and who had allowed himself or herself even the barest minimum of intelligent response to its underlying spirit and intention, could accuse it of being "racist" because some of its characters use offensive racial epithets. These characters belong to their place and time, which is the Mississippi Valley thirty years before Emancipation. (Kaplan 356)

登場人物が使う差別用語は，奴隷解放より30年前のミシシッピー川流域で使われていたものであり，当時の状況を忠実に描くためには必要なことであったというのが，Kaplanの主張であり，大方の擁護側の主張でもある。確かにリアリズムという視点に立ち，当時の社会状況を忠実に再現するために，たとえ差別語であれ同時代の言葉としての使用はやむを得ない，という説明は一応は説得力を持つ。しかし，ここには同時に，Wallaceが危惧するような，差別語を方言という言い方の中に解消しようとする意識が働いて事も確かである。

さらには "nigger" など個々の差別語が存在することが問題であると同じく，方言を表現するための特殊な綴りが作品全体に差別的雰囲気を作り出していることも問題なのではないか。そのことを指摘するのが以下の引用である。

> One obvious feature of southwestern humor infecting *Huckleberry Finn* with objectionable racial overtones is "eye dialect," which pretends to represent nonstandardness by variant (in some cases, merely phonetic) spellings, though the pronunciations represented may actually be at least regionally acceptable. The speech of Jim and other black characters in the novel is marked by extreme forms of eye dialect, while that of the white characters usually is not; the result exaggerates the ignorance and/or deviance of black speakers as compared to white.(Leonard 5)

ここで述べられている "eye dialect" とはその地方特有の方言を示す為に使われる標準と

は異なる綴りのことである。Leonard は南西部のユーモアに人種差別的響きが認められる一つの理由は，その地方特有の方言を表現するために使用されている非標準的綴り，つまり“eye dialect”にあると指摘している。特に，Jim やその他の黒人たちの話し方がある特定の表現法によって特徴づけられている。そのことによって，白人に較べ黒人の無知や逸脱が誇張され読者に伝わるのである。先の *New York Times* が伝えた禁書記事の翌58年に，Ralph Ellison は，“Twain fitted Jim into the outlines of the minstrel tradition,”と述べ，Twain が Jim に被せたイメージはミンストレル・ショーに登場する黒人の“stereotype mask”であると指摘したが，このような読者に与えるイメージには，“eye dialect”が大いに寄与していると考えられる。さらに Ellison は，そのために子供の Huck に較べ大人の Jim の方が幼稚に見え，“It upsets a Negro reader,”と，この事実が特に黒人読者を苛立たせることも指摘している(379)。以後 *Huck* の黒人読者の中でも，特に小中学校の子供に与える影響が大きな問題となって行き，その結果，各地の図書館からの追放や学校のカリキュラムからの排除という，1880年代の出版当時と同じ現象が起きているのである。

出版当時 *Huck* が忌避された真の理由は，Lionel Trilling が指摘するように，*Huck* が“subversive book”(276) であったからである。すなわち，Huck の提示する疑問は当時の社会の支配的規範の根底を揺るがすものであった。 作品の中では，当時の‘genteel’な社会は偽善的なキリスト教ブルジョア社会として，痛烈に非難されているが，その最も有効な表現手段の一つとして“vulgar”な方言が使用されたと言えるだろう。 不道徳な行為や言葉遣いは，直接的に目に触れる為に社会の批判にさらされやすい。最初の禁書事件では，その直接目に触れる方言の“vulgar”な側面が槍玉に上がった。時代が下がり，*Huck* がアメリカ文学の古典に祭り上げられると，同じ方言が，真のアメリカ文学を作り出したとされる作品の特徴として，今度はみずみずしい生気にあふれたアメリカを表現する手段として再認識されるようになる。そして，今日に至っては読者層に多くの黒人層が加わることによって，方言の中にある人種差別的要素が新たにあぶり出されて来たのである。かっては‘genteel’な社会に異議を突き付けた作品がやがて社会を代表する中心的存在となり，今や自らを作り上げた内部にある同じ言葉によって自らに異議を唱えられるという事実は，一方では「古典」と呼ばれ他方では「差別的作品」と呼ばれる事実と共に，*Huck* という作品を境界的位置に置く。それは主人公 Huck の置かれた位置でもあり，彼にとっては居心地の良い場所であるのだが。

Works Cited

Blair, Walter. *Mark Twain and Huck Finn*. Berkeley: University of California Press, 1960.

Briden, Earl F. “Kemble's ‘Specialty’ and the Pictorial Countertext of *Huckleberry Finn*.” *Mark Twain Journal* 26 (Fall 1988). 2-14.

Budd, Louis J., ed. *Mark Twain: Collected Tales, Sketches, Speeches, & Essays 1852-1890.* New York: Literary Classics, 1992.

Champion, Laurie, ed. *The Critical Response to Mark Twain's “Huckleberry Finn.”* New York: Greenwood Press, 1991.

Eliot, T. S. "American Literature and the American Language," an Address delivered at Washington University, St Louis, Missouri, 9 June 1953; 212-22; rpt. vol.2 of *Mark Twain: Critical Assessments*. ed. Stuart Hutchinson. Mountfield: Helm Information, 1993.

Ellison, Ralph. "Change the Joke and Slip the Yoke." *Partisan Review* 25 (1958). 212-22; rpt. vol.2 of *Mark Twain: Critical Assessments*.

Fischer, Victor. "Huck Finn Reviewed: The Reception of *Huckleberry Finn* in the United States, 1885-97." *American Literary Realism: 1870-1910* 16 (Spring 1983). 1-57; rpt. vol.2 of *Mark Twain: Critical Assessments*.

Henry, Peaches. "The Struggle for Tolerance: Race and Censorship in *Huckleberry Finn*." *Satire or Evasion?: Black Perspectives on "Huckleberry Finn."* ed. James S. Leonard et al. London: Duke UP, 1992.

Kaplan, Justin. "Born to Trouble: One Hundred Years of *Huckleberry Finn*." *"Adventures of Huckleberry Finn": A Case Study in Critical Controversy*. ed. Gerald Graff and James Phelan. Boston: Bedford Books, 1995.

Trilling, Lionel. Introduction to *The Adventures of Huckleberry Finn*. New York: Rinehart Editions, 1948; rpt. vol.3 of *Mark Twain: Critical Assessments*.

Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*. ed. Walter Blair and Victor Fischer. Berkeley: University of California Press, 1988.

Vogelback, Arthur Rawrence. "The Publication and Reception of *Huckleberry Finn* in America." *American Literature* 11, (November 1939). 260-72.

Dialect and Racism: The Duality of Words in *Huckleberry Finn*

Early critical responses to *Adventures of Huckleberry Finn* are widely diverse from high praise to harsh condemnation. The most serious impact on the work is made by the Concord Library banning, which withdraws the book from the institution on the ground that it is vulgar and immoral. This banning, together with other scandals such as the obscene engraving and the Estes & Lauriat lawsuit, imposes a negative image on the book, even though they increase its sale by drawing much attention.

At first it is mainly the vernacular languages in *Huck* that incur condemnation from genteel society. But in the course of the next half century when the book begins to be regarded as a national classic, the dialects are celebrated as a way of expressing unique American culture.

The present debates over racism in *Huck* is as heated as those over vulgarism at the time of its publication. The dialects, first condemned as vulgar, are now accused that they contain racial slurs. It is pointed out that those dialects which are used to depict black characters exaggerate the ignorance of black people and make up a derisive racial stereotype. The more black people participate in reading the book the more visible is prejudice so far overloocked in the dialects. The vernacular speech is said to be the integral part of *Huck* as a classic, but it can also be a disintegrative factor in the book.